

日本近現代文学を専攻する学生の情報探索プロセスの研究  
- 未熟練な学習者の情報探索行動について -  
若井 あや子  
(日本能率協会総合研究所 MDB) ayako.wakai@gmail.com

## 1. はじめに

これまで図書館サービスやシステムは、資料や情報源の組織化や標準化を主眼とし、個々の利用者の問題背景を十分に理解せず、利用者の明確なニーズに対応するよう設計されてきた。そのため、自らのニーズに曖昧な利用者が、情報探索をする過程で「分からないことが分からない」という状態に陥った時、従来のサービスやシステムでは解決できない問題が生じていると考えられる。情報行動研究は、学生よりむしろ、情報源やチャネルを確立した経験豊富な研究者や専門家を対象としてきた。しかし、学生は上述の困難に直面することが多いと推測される。学生の学習や研究を支援することは、大学図書館や大学教育の重要な役割のひとつである。その役割を果たすためには、彼らの学習・研究活動における情報行動を理解する必要がある。

## 2. 目的

本研究の目的は、大学図書館や教員による学生の学習・研究活動への学術的支援のあり方を考える前提として、日本近現代文学専攻の大学生と院生の課題達成までのプロセス全体を利用者志向アプローチから記述することである。

学習・研究活動における学生の感情や行動の理解は、教員や図書館員に学生への有効な問いかけと助言を可能にすると考えられる。学生自身にとっても、学習や研究における困難を自ら把握し、対処法を考える助けとなるだろう。

本稿において、学生は図書館の利用者としてではなく、個々の問題背景を含めて捉え「学習者」として位置づける。「未熟練」は学習・研究活動の経験年数が短く、主題への知識、研究や発表のスキルと経験が不足している学習者を指し、対して「熟練」は経験豊富であることを意味する。「満足度」は、学生の自らの発表準備に

おける自信の有無と、課題に対する達成感を指標とする。

## 3. 調査方法

日本近現代文学専攻の学部 3、4 年生と大学院生を対象に、学部生の調査参加者と同じゼミを卒業した筆者が、ゼミ発表のためのレジュメ作成プロセスについて 1 名約 1 時間の対面式インタビューを実施し、録音した。

データ収集は、越塚(1996)と三輪(2001)の方法を参考にし、具体例叙述法の一部を変更して用いた。変更した点は、調査参加者自身ではなく、筆者が調査参加者のゼミ発表準備プロセスにおいて重要・特徴的と考えるインシデントを取り上げた点である。

分析は、文章化したインタビューからインシデントを抽出して、1 つずつカードに書き出し、Kuhlthau の研究(1993)を参考に独自の方法で分類し行った。分析のレベルは 2 つ設け、レベル 1 は、同じような目的を共有する活動を集め、学習者の発表準備過程を数段階に分けた。レベル 2 は、各段階を「行為」、「思考」、「感情」、「戦略」の 4 つのカテゴリで分類した。

本調査は、調査参加者を日本近現代文学専攻者に限定し、完全に自主的な活動ではなく締め切りのあるゼミ発表の準備プロセスを扱っている。そのため、調査結果を直ちに大学生や大学院生の学習・研究活動全体に一般化することはできない。

### 3.1. 調査参加者と課題について

調査参加者は、理論的サンプリングにより選定され、調査協力依頼を受けた日本近現代文学を専攻する 3 年生 5 名、4 年生 4 名、大学院博士前期課程 1、2 年生、後期課程 6 年生各 1 名の合計 12 名である(留学生は含まれない)。

3、4 年生は、全員同じゼミに所属している。

3年生の課題は、自分で選んだ作品を論じた論文を先行研究の中から1本選び(後で「中心論文」と呼ぶ)発表で作品研究史、主要研究論文、中心論文の要旨と意義を述べることである。

4年生の課題は、卒業論文の中間発表として、論文の全体の構想と具体的な論理展開を発表することが課題であった。

大学院博士前期課程1年生と後期課程6年生は、ある作家の作品集から担当を割振られ、担当作品について各自何らかのテーマで発表することが求められた。前期課程2年生は、明治文学の中から後世に影響を与えた作品を取り上げ、その影響について論じることが求められていた。

## 4. 調査結果

### 4.1. 大学3年生

3年生の情報探索プロセスの段階は、「課題の導入 題材の決定」、「中心論文の選択」、「中心論文の理解」、「情報収集」、「レジュメ作成」が見られた。最初の段階は、論じる主題、論理展開や主張はあまり考慮せず、個人的な関心や好みか、ゼミの雰囲気意識して題材となる作品を選ぶ段階である。「課題の導入」と「題材の決定」は2つに明確に分けられないため、「」を用い1つの段階とした。感情面では「さてどうしたものか」といった漠然とした不安や戸惑いが見られた。「中心論文の選択」では、いくつかの論文をざっと読んで選択がなされ、この時、自分の選択基準や決定に対する不信感や不安が顕著であった。「中心論文の理解」において、選んだ論文を初めて熟読し、内容の正確な理解に努める行為が見られた。「情報収集」では、引用・参考文献の収集と作品研究史について必要だと思う論文を集めきることに主眼が置かれており、新たな情報において前段階の理解を位置づけることはなかった。「レジュメ作成」の段階で特徴的なことは、タイムプレッシャーや「もう(頭が)真っ白でしたね」といった混乱、「胃が痛くなるくらいびびってました」という発表に対する恐れ感情であった。混乱と恐れは、レジュメをまとめる段階になって、中心論文の意義を全く見出せないというところから生じていた。3年

生はレジュメで論じる焦点を形成できないまま、レジュメ作成の段階へ入り、プロセスを終了していた。

3年生は終始マイナスの感情を抱え、周囲に愚痴をこぼすが、内容については誰にも具体的に相談しなかった。質問や相談をしない理由は、上手く伝えられないから、一人で考えなければいけないことだと思うからと述べた。

### 4.2. 大学4年生

4年生には、2つのタイプが見出された。満足度が低かった学生と、高かった学生である。両者ともプロセスの最初に「課題の導入 主題の選択」段階があり、同じ行為や感情、思考が見られた。卒業論文をイメージしたり、個人的関心や過去の経験を思い出したり、思いつくままアイデアを出し、論理展開の可能性や、自分の気力について自問がなされた。発想を得るとその場の自信を持つが、本当に自分ができるのかという不安を抱いていた。

満足度の低かった学生は、「予備的探索」から「情報収集」へと移行していき、「レジュメ作成」でプロセスを終了した。「予備的探索」では、関連情報を収集したが、開始当初よりも収集の範囲が広まっていき、收拾がつかない状態であったと述べた。「基本的に常に疑心暗鬼」という不安の感情を抱き、アイデアが「ぼんぼん閃く時と、なかなか出ない時」があると述べ、気分次第であることが分かった。彼らのプロセスには、「焦点の形成」が見られず、不安の感情が最後まで持続し、思考も曖昧なままであった。

満足度の高かった学生のプロセスには、「予備的探索 焦点の形成 情報収集」、「レジュメ作成」の段階が見出された。「予備的探索 焦点の形成 情報収集」では、主題に関連する情報を網羅的に収集し理解していく中で、徐々にある特定の情報を収集するという作業に移行した。焦点が絞られると、それまで感じていた「自分の論がどこまで通用するのか」という不安が自信と充実感にとって代われ、思考は明確化し、個々のアイデアを捉え直し、発展できていた。「レジュメの作成」はISPモデルの「表現」と同様の段階であった。

発表準備の全体を通じて、教員や図書館員に具体的なレジユメの内容を相談する学生はいなかった。

#### 4.3. 大学院生

大学院生の発表準備プロセスには、Kuhlthau の ISP モデルとほぼ同じ「課題の導入」、「主題の選択」、「予備的探索」、「焦点の形成」、「情報収集」、「レジユメの作成」が見出された。

まずは、課題の要件、展開可能な主題を考える「課題の導入」、過去の経験と持っている知識による「主題の選択」が見られた。主題を選択すると、情報源を使い分け関連情報の探索をし、収集した情報の位置づけと整理がなされ、焦点が段々と形成された。同時に主題に対する関心が高まり、「考えることが間違えてないというのは自信がありました」、「考えを裏付ける資料さえ「出てくれば、何とかなるだろう」という自信を持ち、楽観的な感情が見られた。次に、再度情報収集がなされた。この「情報収集」は前述の収集とは、自らの焦点に適合する特定情報のみを収集する点で異なっていた。それらを読み、理解し、考えを発展させたり、再解釈したりする行為が見られ、焦点の明確さが増した。「レジユメ作成」は、今まで考えてきた論が明確な文章になるよう推敲し、作成する段階であった。

大学院生は、プレッシャーや不安を全く感じていないわけではなく、それらを抱えることは「当然だ」という捉え方をしており、一貫して安定した感情を保っていた。

誰かに相談や質問をするという行為は一切見られなかった。相談等をしなかった理由はデータとして収集できなかったが、インタビューから推測すれば、相談をしなければならないような事態になかったからだと考えられる。

### 5. 考察

#### 5.1. 未熟練な学生の発表準備プロセス

学習・研究活動に未熟練な3年生は、プロセスの開始から終了まで常に不安の感情を抱いており、思考は曖昧なままで、行為には方向性や指針が見られなかった。彼らは、レジユメ作成

の段階に入って初めて、自分が焦点を定められていないことに気付いた。しかし、焦点をどのように定めたら良いのかが分からず、できるものなら相談したいと思いつつも、してはならないことだという意識と、問題を具体的な言葉にできない理由から、教員や友人に相談をしない、できないという状況にあった。図書館員への相談は、学生の考えの範疇になかった。学生にとって図書館は資料を収集するための場所であり、図書館員への相談を思いつきもしなかったからである。

満足度が低かった4年生と高かった4年生は、同じ学年であるため熟練度で比較することはできない。しかしながら、両者に満足度の違いが出た理由としては、前者は大学院進学希望者であり、動機付けの違いがあったのではないかと推測できる。

#### 5.2. Kuhlthau の ISP モデルとの比較

調査結果から、学部3年生、4年生、大学院生のグループごとに、発表準備プロセスにおける段階を ISP モデルのそれと比較した（図5-2：「 」を含む段階は、明確に分けられない段階で、徐々に移行していくことを表し、「 」を含む段階は、明確に分けられない段階で、相互に作用していることを表す）。調査参加者が学習・研究活動に未熟練であるほど、言わば「理想のプロセス」である ISP モデルとの離脱の度合いが高まり、異なる段階を経験していた。

ISP モデルはアメリカの学生たちに試されてきたモデルだが、異なる文脈にある日本の学生の情報探索プロセスを理解するにあたって、非常に有効な枠組みを与えるモデルであることが分かった。

#### 5.3. 焦点の形成の重要性

Kuhlthau (1993) の研究では、焦点の形成ができない調査参加者が約半数いたことと、不確実性がプロセスの最後まで持続していたことが明らかにされている。この結果から、彼女は、多数の生徒が焦点を明確にできないまま「表現」の段階に入っていると仮説を提示している。焦点が明確化すれば、不安な感情が減少し、自

信が増大する。また、思考では方向性を持って、収集した情報を基にアイデアを発展させ、組み合わせて、主題の焦点を絞っていくことができる。そのため、Kuhlthau は、「焦点の形成」はプロセスの転換点と主張する。

思考、方向性のある行為が特徴的であった。両者のプロセスにおいて、最も異なった点は、「焦点の形成」の有無であり、未熟練な学生が抱える問題は焦点を形成できない点にあることが分かった。

〔低〕 ISPモデル		段 階					
		KuhlthauのISPモデル	課題の導入	主題の選択	予備的探索	焦点の形成	情報収集
本研究の 分析結果	大学院生	課題の導入	主題の選択	予備的探索	焦点の形成	情報収集	レジュメ作成
	課題の満足度が高い学部4年生	課題の導入 主題の選択		予備的探索 焦点の形成		情報収集	レジュメ作成
	課題の満足度が低い学部4年生	課題の導入 主題の選択		予備的探索		情報収集	レジュメ作成
	学部3年生	課題の導入 題材の決定		中心論文の選択	中心論文の理解	情報収集	レジュメ作成

図5-2：ISPモデルの段階と分析結果の比較

本調査でも、3年生と課題の満足度が低い4年生のプロセスには、「焦点の形成」が見られないまま「情報収集」に入っていた。そして、不安や疑心暗鬼の感情は最後まで持続し、思考は曖昧なままプロセスが終了していた。とりわけ3年生の発表準備プロセスには、混乱や不安といった感情が目立った。

以上により、本研究は不確実性原則と「焦点の形成」の重要性に関するKuhlthauの仮説と主張を支持する。

## 6. まとめ

本稿では、日本近代文学を専攻する大学3、4年生と大学院生のゼミ発表の準備プロセスを、数段階に分け、各段階における「感情」、「思考」、「行為」の点から記述することを試みた。

未熟練な学生は、発表準備プロセスにおいて、終始不安の感情、曖昧な思考、明確な方向性のない行為が顕著であることが分かった。熟練した学生は、安定した感情や自信を持ち、明確な

従来の大学図書館は、未熟練の学生と熟練した学生へ一律したサービスやシステムを提供してきた。また、焦点が形成された後の明確なニーズに対応するよう設計されてきた。調査結果より本稿は、学生への学術的支援において、未熟練な学生を対象としたサービスやシステムと、焦点が形成される前の曖昧な情報ニーズを考慮する必要性を示唆する。

## 参考文献

- Kuhlthau(1993): Carol C. Kuhlthau. *Seeking Meaning: a process approach to library and information services*. United States. Ablex Publishing. 199p.
- 越塚(1996): 越塚美加. 文献のブラウジングが研究過程に与える影響. *学術情報センター紀要*. 8 pp.131-142.
- 三輪(2001): Use of human intermediation in information problem solving: A user's perspective. *ASIST. Processing of the 64th ASIST annual meeting*. 38 pp.355-371.